

~~~~~目次~~~~~

1. 本年度の編集責任者と新事務局より
2. フランスの言語学者にインタビュー
3. フランス語学が出来る大学案内
4. 海外大学言語学情報
5. 運営・企画担当委員より
6. 今後の例会案内
7. 各地の研究会紹介
8. フランス語学談話会について
9. 新企画<アンケート：最近読んだ面白い論文・本の紹介>

~~~~~

## ※ 1. 本年度の編集責任者と新事務局より

### (1) 仕事の分担と分散化について

ご存じのように本会では編集委員会での合議制で会を運営しています。そして、編集委員の中から例会やシンポジウムを企画したりコーディネートして運営する企画・運営担当と、機関誌BELFの編集発行の中心となる編集責任者を毎年決めています。（運営・企画担当に関しては「運営・企画担当より」の記事をご覧ください。）今年度の編集責任は春木仁孝が務めます。また、事務局はこれまでの京都産業大学から、この4月1日よりこれから3年間大阪大学に移ることになりました。本会では仕事の分担を進めると同時に、どうしても関東地方に偏りがちな負担を軽減するために、暫く前から、3年交代の事務局を当分の間、関西の大学に置くことと、編集責任者を関西在住の編集委員が引き受けるという試みを行なっています。歴代の事務局や編集責任者が仕事の手引きを整備していくことで、今後とも仕事を出来るだけ公平にいろいろな人が分担できる条件を整えていきたいと考えています。とはいえ、事務局には専従の人がいるわけではなく、編集委員が大学の職務と並行してボランティア的にしているわけですから、対応が遅くなることや、不備があるかも知れませんが、会員の皆様にはその点をご理解とご寛恕を頂きたいと思っております。

新事務局の住所等は以下の通りです。

〒560-0043 豊中市待兼山町1-8  
大阪大学言語文化部フランス語資料室内  
日本フランス語学会事務局  
Tel. 06-6850-5940（井元）  
e-mail flsアットマークlang.osaka-u.ac.jp

（電話は井元の研究室のダイヤルインの番号です。電子メールは事務局専用で、春木、三藤、

井元の3人に届きます。連絡は出来るだけ、郵便または電子メールでお願いいたします。)

## (2) 投稿について

会員は機関誌である『フランス語学研究』に投稿する権利があるわけですが、投稿しようと希望される方は、原則として先ず例会で発表して下さるようお願いいたします。このような規定があるわけではありませんが、やはり多くの人の意見を聞いた上で、よりよい論文を投稿して頂くことで、雑誌の質も上がっていくことになり、査読の段階における無駄を少なくすることが出来るようになると思います。査読はそれぞれの論文に対して3人の編集委員が当たりますが、それ以外に相対評価のために編集責任者と編集委員がもう一人総ての論文に目を通すという形で行なわれています。例会発表の予定がこのニューズレターに載っていますが、多少の調節は可能な場合もありますので、今年度に投稿を希望される方で例会発表をまだされていない方は、一度運営・企画担当の編集委員までお問い合わせ下さい。最近では発表希望者が多いようですので、投稿云々に関わらず、発表を希望される方は早いうちにお近くの編集委員や事務局までお申し出下さい。

また、論文以外にも『フランス語学研究』には、論評や語法ノート、新刊紹介などの欄があります。これらについてもどしどし投稿して下さい。投稿論文は、当然のことながら未発表のものに限られます。この点は今回から投稿規定に明記する事になりました。ただし、最近のインターネットの普及で、論文を発表される前にご自分のホームページで公開される方がおられますが、これは印刷媒体での発表とは異なりますので、未発表とみなすことが確認されました。

また、フランス語や英語で投稿なさる方は、必ずネイティブ・チェックを受けた上で投稿して下さいようお願いいたします。論文などのフランス語レジュメについても同様です。編集委員が余分な仕事をしなくても済むように、この点もよろしく申し上げます。

## (3) 論文の枚数規定の変更について

ワープロやパソコンの普及に伴い、論文の枚数規定の上限を旧来の400字詰め原稿用紙40枚から、単純な字数計算で40字×40行で10枚というようにしていましたが、一行の字数が増えたために原稿用紙40枚の場合と比べて、40字×40行で10枚とするとかなり短くなるという指摘が複数の会員からあり、検討の結果、原稿用紙40枚とほぼ同量の枚数として40字×40行で12枚と規定を変更することに編集委員会が決定しました。今年度から適用されます。論文の上限枚数以外は従来通りです。

## (4) 編集委員の交代について

本年度は次の3人の方が編集委員を辞任されました。

林迪義氏、荒井文雄氏、尾形こづえ氏

また、次の方が編集委員に新任されました。

遠山一郎氏（早稲田大学）

## (4) 会費の納入について

本年度の会費をまだ納入されていない方は下記の郵便振替の口座に振り込みをお願いします。

郵便振替口座番号 00160-6-56308

2年以上会費を滞納された方には、学会誌はお送りしていません。また、4年間会費の納入

がない方は、退会扱いとなりますのでご注意ください。なお、『フランス語学研究』のバックナンバー購入希望の方は、フランス図書に販売を委託していますので、直接フランス図書にお問い合わせ下さい。

#### (5) 住所変更などについて

住所（連絡先）・所属機関等の変更があった場合は、出来るだけ早く事務局までお知らせ下さい。

#### (6) 例会通知について

例会通知は、葉書を送って下さっている方にお送りしています。通知をご希望の方は、官製葉書にご自分の住所・氏名を表書きしたものを10枚ほど事務局までお送り下さい。なお、お名前は『...行』ではなく『...様』としてください。なお、例会の案内は、白水社の『ふらんす』や大修館の『月刊言語』、学会のホームページ、メーリングリストのfrenchlingでも流されていますのでご参照下さい。

#### (7) 論文等の情報をお知らせ下さい

最近発表されたフランス語研究に関する論文がございましたら、タイトル、発表年、掲載雑誌名、掲載ページ等の情報をお知らせ下さい。また、最近提出された修士論文や博士論文についても、執筆者、タイトル、提出大学名、年度等をお知らせ下さい。（もちろん、自己申告でも結構です。）いずれも、情報を『フランス語学研究』に掲載します。（春木仁孝）

## ※ 2. フランスの言語学者にインタビュー

～～Claire Blanche-Benveniste 氏インタビュー～～

プロヴァンス大学教授でロマンス系言語対照言語学、特に話し言葉のコーパス言語学を専門とするClaire Blanche-Benveniste 氏が1999年7月1日～14日まで日本に滞在し、東京、京都で講演されました。以下は、カフェでの歓談の機会などにこれまでの研究の過程、これからの研究の方向についてお聞きした話をまとめたものです。

「まずソルボンヌで lettres modernes の学士号を取りました。その頃は lettres modernes の課程で特に言語学を教えることはなかったので独学するしかありませんでした。ソルボンヌには一般言語学の Martinet でしたが、私は Martinet にはつかず、Wagner につきました。今も「我が師」と考えているのはWagnerで、多大な影響を受けました。同時にその頃学会でギョーム派の学者、Moignet、Stefanini、Valin 等の人たちに出会い、Guillaume の仕事のうち特にまず歴史言語学の部分に興味を持つようになりました。Wagner の指導のもとで古仏語を勉強し、修論では『バラ物語』の校訂を手掛けました。その後バイルートの大学でフランス語と言語学を教え、フランスに戻ってからはリヨン、パリ、そしてエックスの大学のポストにつきました。もう一人Wagner の他に影響を受けたのは、任務でザイールに滞在中に出会ったベルギーのアフリカ言語研究者 Karel van den Eynde (Louvain大学) です。その頃（1968年頃）は構造言語学をあらゆる観点から批判するのが流行していましたが、彼は Harris の方法論を深く理解した上で、賢明なやり方で実地調査に基づくアフリカの言語の形態・統辞分析に適用していました。彼との共同研究の中で私はHarris の方法論と適用の仕方に目を開かれ、それをフランス語の話し言葉に適用しました。

国家博士論文の Recherche en vue d'une theorie de la grammaire francaise: essai d'application a la syntaxe des pronoms はVan den Eynde の仮説に基づいて Wagner の指導のもとで、エックスで教職についてから書いたものです。

エックスで話し言葉の研究チームをつくったのは1975年頃です。これは当時の言語学の流行に逆らう形で始まりました。その頃はそれまでのように文学の引用例を使うのをやめて、皆、作例（しばしば不自然な文でした）を使っていました。このような中で Stefanini がバックアップしてくれました。彼は専門が歴史言語学でしたので、実際に共同研究をしたことは有りませんが、素晴らしい人物でした。

現在の研究チームには大量コーパスを活用するため情報処理の専門家もいます。現在進めている共同研究ではロマンス系言語の国々、イタリア、スペイン、ポルトガルの研究者と話し言葉、そして、書き言葉について研究の方法を共有しようとしています。このように研究をすすめることによって、言語を個別に取り上げるより記述も適切なものになり、ロマンス系言語全体がより良く把握できるようになると考えています。統辞、形態、韻律、無言症の子供の言語習得、翻訳の分野ですすめています。」（編・訳 尾形こづえ）

## ※ 3. フランス語学が出来る大学案内

### ◎慶應義塾大学 文学部

現在も活躍している名誉教授の鈴木孝夫・松原秀一などが引き継いだ伝統が文学部には生きています。これは言語を歴史や文化などと切り離さないように努め、知的好奇心を強くそして広く持っていこうとする態度です。従ってフランス語そのものとフランス語学の知識は当然ですが、同時に、学部でも大学院に進んでも、そしてもし教育を職業にしても、歴史・社会・文学・芸術などの教養を身につける努力を続けていくことをお勧めします。学部では興味のあることなら大抵単位に結びつきますし、言語文化研究所などの諸機関との連絡も密です。

他方、言語学と言語に関しての教養も大切です。フランス語と英語だけで言語を考えるというのでなしに、ロマンス語系・ゲルマン語系言語、そしてより広く他の印欧語や非印欧語の知識を増やしていくことが大切です。またフランス語には現代語だけ知っていても説明できないことが多くあります。

以上の観点から文学部を見ますと、文学関係では各時期についての専門家がいますし、歴史・文化についても人材が揃っています。例えば『翻訳仏文法』は語学専門の学生の人たちにも広く読まれています。この著者はフランス18世紀が専門の鷲見洋一です。言語学では言語文化研究所の授業を受けることも出来ます。言語としてはフランス語の他に英・独・中・韓・露・西・伊からの選択ができ、他にギリシャ・ラテン語も学習できます。

フランス語学が専門のスタッフは川口順二と、今年から新たに加わった喜田浩平の2名です。川口はフランス語学の授業で構文・形態・語彙・意味論、社会言語学・仏語史などに言及しています。喜田浩平は意味論・語用論・言語哲学が主な研究分野ですが、語学教育にも積極的に取り組んでいます。卒論で語学関係のテーマを選ぶ人も毎年出ています。なお文学部以外でも、経済学部の前島和也や総合政策学部の古石篤子など語学専門のスタッフがいますので、フランス語をより広い視野から見る事ができるでしょう。

文学研究科の前期課程の入学試験は9月末か10月始めに行われます。99年を例にとると、フランス語及び第二外国語の語学の試験に加えて、文学および語学の専門に関する試験がありました（詳細は三田キャンパス入学センターにお問い合わせください）。後期課程の入試は3月始めです。（川口 順二）

## ※ 4. 海外大学言語学情報

### (1) Paris III (Sorbonne Nouvelle) 大学

Paris III (Sorbonne Nouvelle) は文学、語学、地域研究などを中心とする大学ですが、communicationやcinematographieを学ぶことでも知られています。通称"Censier"の校舎には、

気軽に利用できる開架の総合図書館があります。言語学科 (UFR : Linguistique et phonétique générales et appliquées) の第三期課程では、Sciences du Langage と Phonetique の二種類の DEA 及び Doctorat を取得することができます。研究可能な分野はフランス語、アフリカ諸語、ロマンス諸語、フィン・ウゴル諸語、音声学、応用言語学、談話分析、民族言語学、言語自動処理、記号論など。フランスの maîtrise を持っていない外国人が DEA に登録する場合、原則としてフランス語の能力試験を受けることになります。その結果によっては一年の研修期間を課されることもあるようです。DEA の取得条件は次の三つです。1) 最低175時間 (週平均約8時間ほど) の授業出席。特に必修の授業はありません。また50時間まで他機関の授業に振り替えることも可能。2) 授業の枠内で成績を二つとること。大抵はレポートか発表による。3) 論文の提出と口頭審査。これが三つ目の成績になります。1999-2000年度の DEA の講義数は50近くありましたが、その中からいくつかをご紹介します。いわゆる「伝統的」な枠にとらわれない、学際的な研究傾向がみられるようです。

Aspects du changement linguistique dans l'histoire du français (N. Andrieux-Reix), Semantique et lexicale (B. Bosredon), Des français écrits : normes discursives et usages (S. Branca-Rosoff), Le français comme langue internationale de travail et d'échanges (J.-P. Caput), Approches psychologiques et sociologiques de la communication (C. Chabrol), Les interactions en classe de langue (F. Cicurel), Acquisition du langage (O. Delefosse), Interpreter le sens, ou traduire des langues? (J. Fernandez-Vest), Fonciation et langues africaines (R. Kabore), La phrase complexe (P. Le Goffic), Theorisation et methodes en linguistique des discours (S. Moirand), Analyse de l'oral (M.-A. Morel), Recherches actuelles aux interfaces syntaxe-semantique et syntaxe-morphologie (G. Rebuschi), Systematique comparee des langues romanes (A. Rocchetti), Langages sociaux et politiques (A. Salem), Prosodie : de la recherche aux applications (J. Vaissiee), Didactique, enseignement et apprentissage des langues etrangeres et secondes (D. Veronique).

言語学科の連絡先は、Institut de LPGA (19 rue des Bernardins 5e, tel.: 01.44.32.05.75, fax.: 01.43.29.70.13)。フランス語学関係は、Centre de linguistique française, Paris III (13 rue de Santeuil 5e, tel. : 01.45.87.41.35, fax.: 01.45.87.48.92)。パリ第三大学のウェブサイト (<http://www.univ-paris3.fr>) も参考にしてください。

(川島浩一郎 東京外国語大学博士後期)

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

(2) パリ第7大学 (Paris 7 - Denis Diderot)

パリ第7大学の言語学科で準備できる修士号は、次の3つとなります。

- Maitrise Sciences du Langage
- Maitrise Français Langue Etrangere
- Maitrise Linguistique et informatique

第三期課程では、次の2つの DEA のうちいずれかを取得しなければなりません。

- DEA Linguistique theorique, formelle et automatique (LTFA)
- DEA Phonetique

専門化の進んだ音声学の DEA を別とすれば、すべての言語学の学生は DEA LTFA を修了することになります。LTFA 修了の要件は、最低3つ (最大5つ) のセミナーに出席し、最終的に一本の論文を提出することとなっています。最低3つのセミナーのうち、2つまでは、"Tronc commun" と呼ばれる共通授業に属するものでなければなりません。この枠内で選択できる授業としては、言語学史の S. Auroux、テキスト自動生成の L. Danlos、音韻論、セム系語史の J. Lowenstamm など、パリ7に所属する先生方の授業の他に、J. J. Franckel、F. Corblin、Ch. Fuchs など他の大学に席を置かれる先生方の授業もあります。この2つの単位を決められた枠内の授業で満たせば、後はその年度開講されているどの授業をとってもかまいませんが、指導教官の授業は単位として数えられないことに注意が必要です。

他に開講されているパリ7の先生方の授業としては、HPSG、TAG などの形式文法に関する Abeille の授業、語彙論に関する C. Cortes の授業、Lexique-Grammaire の M. Gross、形態論・語

彙意味論に関する H. Huot の授業、アメリカインディアン諸語の M. Launey、意味論の N. Riviere などが挙げられると思います。

最後に実際上の注意として、フランスに来てはじめて DEA から始める学生に、補習として修士課程の授業をいくつか取ることが要求されている場合があります。

(中村卓也)

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

### (3) ジュネーヴ大学 (スイス)

ジュネーヴ大学文学部言語学科は一般言語学、言語情報科学、フランス語学、英語学の4つの部門からなり、5名の教授から研究助手までを含む約40名のスタッフが統辞論、音韻論、形態論、意味論、語用論、談話分析、言語習得、社会言語学、心理言語学、言語自動処理など幅広い分野の研究を様々な言語を対象に行っています。学部レベルでは上に挙げた4つの分野を全て学ぶことができ、広い範囲わたる言語学の知識を習得することができます。また、大学院課程にあたるDEA(今年度から従来のDiplome d'etudes superieures から変更)とecole doctoraleのプログラムは談話分析、言語情報科学、比較統辞論の3つの部門から成っており、特にDEAのレベルにおいては外国人留学生の受け入れにも積極的です。DEAは最低1年間で取得することが出来、4つのセミナーへの出席、レポート2通、そして論文の提出が必須となっています。主な指導スタッフとしては、談話分析講座のEddy ROULET氏、Jacques MOESCHLER氏、Antoine AUCHIN氏、言語情報科学論講座のEric Wehrli氏そして比較統辞論講座のLuigi RIZZI氏を挙げることができます。

ROULET氏は自身が確立し20数年来発展させ続けている"le modele modulaire"を用いたアプローチで会話を始めとする談話分析を様々な角度から試み、また講師や助手と共に談話分析の研究グループを構成しています。MOESCHLER氏は関連性理論を基盤にした語用論的談話分析のための理論を生み出し、現在は主に談話解釈における時制の機能と役割についての研究を進めています。氏もまた5人のメンバーから成る研究グループ("Inference directionnelle, representations mentales et pragmatique du discours")を率いています。AUCHIN氏は主にプロソディーに関する問題を、ROULET氏の理論を基盤とした心理学的なアプローチを用いて扱っています。LATL(Laboratoire d'Analyse et de Traitement du Langage)を率いるWehrli氏は自然言語の自動処理と自動翻訳についての研究をし、RIZZI氏の現在の研究は言語習得とロマンス語族言語間の統辞論的比較研究に及んでいます。特に大学院レベルの講義においては各担当教官の現在発展中の研究に触れることが出来ます。また、各講座がそれぞれ月に1～2回の割合で開いている講演会や1、2年に一度行う4日間の集中セミナーにおいては欧米各国からの研究者が講演を行い、ジュネーヴにいながら外国で行われている様々な分野の研究と研究者に触れることが出来るというメリットもあります。ジュネーヴ大学文学部言語学科のホームページのアドレスは<http://www.unige.ch/lettres/linge/main.html>です。

(なお、スイスの国費奨学金の募集は、東京にあるスイス大使館を通して行われます。応募時にはスイスの大学での指導教官からの受け入れ証明書が必要になります。私自身が選抜試験を受けたのは4年以上前のことになるので変更になっていることも考えられますが、試験は語学の筆記試験とフランス語またはドイツ語での面接でした。また奨学金は基本的には10月から翌年7月までの1学年度分ですが、場合によってはもう1年延長可能です。)

(田原いずみ ジュネーヴ大学言語学科博士課程)

## ※ 5. 運営・企画担当委員より

運営・企画担当委員は通常の例会発表、海外の研究者を招いての特別発表、シンポジウムなどをオーガナイズしています。2000年4月より関東側の運営委員が、大久保(正)・Dhorne(副)より、青木(正)・Dhorne(副)に交替しました。関西側は引き続き大木・木内が担当

しております。

昨年度は7月の特別例会で、Universit<sup>é</sup> de Provenceの Claire Blanche-Benveniste 氏の講演会を青山学院大学・日本フランス語学会共催で催しました。

昨年の日本フランス文学会春季大会の折には、関西側運営委員の企画でシンポジウム「フランス語学とコーパス研究」が開催されました。「フランス語学にとってコーパスがどのような意味を持つか」、「実際にどのようにコーパスを構築して使うか」という二つの側面からこの問題を検討しました。今年度のシンポジウムは、「フランス語をめぐる言語と国家の問題について」（関東側企画）というテーマで現在準備が進められています。

その他の例会については、昨年度については『フランス語学研究』の「例会案内」、今年度については下記の「例会案内」をご覧ください。また学会運営の方法についてご意見や提言のある方は、お近くの編集委員までお申し出ください（編集委員の構成は『フランス語学研究』巻末またはフランス語学会ホームページをご参照下さい）。

来年度も、例会に加えて、シンポジウム、また共通テーマによる発表、海外の研究者を招いての特別発表などを企画予定です。アイデアをお持ちの方は運営委員にご連絡ください。会員の皆様の例会への積極的な参加をお願いします。（大久保伸子）

## ※ 6. 例会案内

6月以降の例会予定は以下の通りです。なお、この4月から例会会場が早稲田大学に変更になりましたのでご注意ください。11月は京都で行われますが、それ以外は早稲田大学で3時から6時まで行われます。

例会の最新の情報や、詳しい会場案内はフランス語学会のホームページで見ることができますので、そちらも合わせてご参照下さい。

6月24日（土）

加藤千尋（東京大学大学院 DC）

「フランス語の半過去形と反復性について」

東郷雄二（京都大学）

「Elle est morte a l'hopital 型の定名詞句指示：内包、外延、あるいは第3の道」

7月8日（土）

喜田浩平（慶応義塾大学）「未 定」

奥田智樹（名古屋大学）「falloirについて」

9月30日（土）特別例会

Pierre Cadiot（Universite de Paris VIII）「未 定」

10月7日（土）

須藤佳子（東京大学大学院 DC）

「知覚動詞について」

田口紀子（京都大学）「未 定」

10月28日（土）

塩田晶子（東京外国語大学）「未 定」

大木充（京都大学）

「名詞句の指示性の確立—le N と son N」

11月19日（日）もしくは18日（土）

川口順二（慶応大学）「未定」  
藤田知子（神田外語大学）「未定」

12月16日（土）

春木仁孝（大阪大学）「大過去」  
木内良行（大阪外国語大学）「未定」

## ※ 7. フランス語学談話会について

年に2回、フランス語学談話会が開かれていますが、この会の性格やフランス語学会との関係について時々誤解があるようですので、当初から談話会に関わってこられた京都大学の東郷さんに談話会についての説明をお願いしました。（編集子）

フランス語学談話会は、当学会の正式な行事ではなく、もともと有志の自主的な集まりとして発足したものです。1985年に編集委員が大幅に交替した結果、関西在住の委員が多数参加することになり、年一回11月例会を関西で開催することになりました。これを機会に、11月の関西での例会の折りと、通常の例会がない3月に東京での年二回、有志の気軽な発表会として計画されたものと記憶しています。例会ではある程度練られた発表が期待されているのにたいして、談話会は文字通り何か話題を提供し、議論しあう場として機能してきました。

ここ数年、談話会の傾向として、通常の学会の例会では扱えないようなテーマを取り上げています。例えば1995年には「語順をめぐって」という統一テーマのもとに、関西でシンポジウム形式の談話会が開かれました。1997年には「カテゴリー化」をテーマに、本学会の会員である井元秀剛氏（大阪大学）の他に、英語学から杉本孝司氏（大阪外国語大学）、国語学から金水敏氏（大阪大学）の参加を得て、多様な角度からの議論が展開されました。この頃から特に、通常の例会では実現が難しい「異業種交流」が活発化したように思います。1998年には3月の東京での談話会で、愛知大学の中尾浩氏と東北大学の後藤齊氏が、コンピュータにおける文字コードと人文学におけるインターネットの使用について発表されました。記憶に新しいところでは、本年3月に「空間表現をめぐって」というテーマのもとに、砂川有里子氏（筑波大学）、松本曜氏（明治学院大学）、荒井文雄氏（京都産業大学）の参加による談話会が開かれ、活発な議論が展開されました。

このような「異業種交流」は、ややもすれば「フランス語学」の問題設定・研究方法に固定しがちな傾向に風穴を開けて、新鮮な驚きを味わうことができる貴重な機会です。おそらく談話会は今後もこのような傾向を強めて行くことと思われます。現在、関東では阿部宏氏（東北大学）と杉山利恵子氏（明治大学）が、関西では井元秀剛氏（大阪大学）と三藤博氏（大阪大学）が世話役を担当しておられます。談話会のお知らせはメーリングリストの frenchling でも流されています。どうぞみなさまもご参加ください。（東郷 雄二）

## ※ 8. 各地の研究会紹介

学会の例会以外の研究会の案内です。

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

### (1) フランス言語学を一緒に勉強する会（関東）

原則として第2土曜日に慶応義塾大学で開いている勉強会です。1999年4月から2000年5月までの発表は以下の通りでした。

4月17日 渡邊淳也（日本学術振興会・特別研究員）  
「他者の言説を表す条件法」



- 6月12日 奥田智樹（名古屋大学）  
「falloirについて」
- 7月17日 渡邊淳也（日本学術振興会・特別研究員）  
「Marion CAREL(1994)論文読み合わせ」
- 9月18日 藤田知子（神田外語大学）  
「非識字(illettrisme)について」
- 11月13日 長沼圭一（筑波大学DC）  
「タイトル化された無冠詞について」
- 12月4日 髭 郁彦（パリ第5大学博士課程修了）  
「雰囲氣的意味について」
- 4月15日（土）中尾和美（フェリス女学院非常勤）  
「Jean, les yeux fermes タイプの同格について」
- 5月13日（土） 須藤佳子（東京大学DC）  
「voirの助動詞的用法について」

参加者は毎回15名程度。完成度が高い必要はなく、アイデア段階での試運転的発表も歓迎いたします。3時間と時間がたっぷりあり、発表の途中いつでも質問やコメントをすることができます。どのように研究の質を高めていくか、参加者全員で考え議論します。時折、論文等の読み合わせもします。

これからの予定は次の通りです。

- 6月10日（土） 塩田明子（慶應義塾大学非常勤）  
「話し言葉におけるいわゆる present de narrationについて」

- 7月15日（土） 小熊和郎（西南学院大学）  
「ダケ／バカリとseulement」

(OGUMA, K.: Des facons de delimiter: cas de bakari et dake en japonais 読み合わせ)

予定のお知らせはフレンチリングおよび郵送で行っています。フランス語学・言語学に興味をお持ちの方は世代を問わずぜひご参加下さい。発表ご希望の方は世話人まで。（世話人：川口順二、藤田知子）

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

## (2) 関西フランス語学研究会

毎月第3、または第4土曜日に、大阪日仏センターで関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。気楽な会ですので、言語学に興味のある方でしたら、関西の方に限らず、どなたでもいらしてください。最近では次のような発表がありました。

- 2月19日 藤田康子（関西学院大学）  
「コピュラ文の意味構造」
- 3月25日 藤浪円（関西大学大学院修士）

「フランス人学生の依頼表現」

4月15日 森香奈絵 (京都大学大学院修士)

「フランス語の否定文中に現れるdeについて」

なお、次回の発表予定は次のとおりです。

6月17日 (土) 16:00 大阪日仏センター

田中 善英 (獨協大学院博士課程)

「定冠詞の無標性～定冠詞に指示機能はあるのか」

発表を希望される方は木内までご連絡ください (tel & fax : 06-6366-2182 または e-mail: kinouchiアットマークpost01.osaka-gaidai.ac.jp)。

## ※ 9. アンケート

フランス語や言語学の分野での論文や本の数はますます多くなり、面白いものを見逃すことも少なくありません。『フランス語学研究』には新刊紹介の欄がありますが、それとは別に気楽な情報源として、フランス語や言語学に関する本 最近読んだもので面白かったものを紹介して貰うアンケートを企画しました。発表、発行された年代は古くてもかまわないということで、まずは新旧の編集委員とその近辺の人など、声をかけやすい人をお願いしてみました。もし好評であれば、アンケートの対象をいろいろ考えて今後も続けていきたいと思えます。ご意見をお寄せ下さい。形式の指定はしていませんので、不統一なところもありますが、一部こちらで変更させてもらった部分もあります。回答者および読者のみなさん、その点ご了承下さい。

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

青木三郎

(1) Fisher, S.(1999): *Enonciation - manieres et territoires*, *Ophrys* 251 p.

ソフィー・フィシャーの長年の論考をまとめた論文集。哲学、心理学、論理学、談話分析 (政治、社会現象) が交差するところの<場>として、言語を捉える視野の広さが読みどころ。

(2) Kuzmider, B.(1999): *Linguistique contrastive et traduction - Aspect, temporalite et modalite en polonais et en francais*, *Ophrys*, 294 p.

著者の母語であるポーランド語とフランス語の対照研究。スラブ語の一つとして、ポ語もアスペクト現象が複雑で、かつ興味深い。対照研究の方法や実際の成果に関して示唆される部分が多いので、日仏対照研究に興味をもつ人には有意義である。

小熊和郎

(1) Souesme, J.-C.(1992): *Grammaire anglaise en contexte*, *Ophrys* あまりフランス語に慣れ過ぎて英語を忘れていたことに気づきました。フランス語の視点から見た英文法というのはなかなか刺激的。別冊でexercicesもあり。Ophrysからはこの他にも Culioli の影響下の発話論的英語関連著作がいくつか出ている。

(2) Plantin, Ch. (1996): *L'argumentation*, coll.memo, Seuil 93ページの小型本ながら、「論証法」についての概観が極めててぎわよく整理されている。教養をつけるために大学院での読本として使えるのではないか。

阿部 宏

(1) Lakoff, G. and M. Johnson (1999): *Philosophy in the Flesh, The Embodied Mind and its*

Challenge to Western Thought, Basic Books (New York).

認知言語学の特にメタファー研究の観点から、時間、出来事、心、自己、倫理などの古典的な哲学的問題を考察したもの。

(2) Haspelmath, M.(1997): From Space to Time, Temporal Adverbials in the World's Languages, Lincom Europa (Munchen - Newcastle).

認知言語学や文法化研究で近年さかんに行われている空間から時間への意味拡張について、特に多くの言語における副詞相当句を分析し普遍性を抽出している。

(3) 定延利之(2000): 『認知言語論』, 大修館書店。「奥さんが3回変わる」のように、実際変わったのは2回でも3回と表現する「度数剰余文」について独自のスキニングの概念により分析する。

井元秀剛

(1) Fauconnier, G.(1997): Mappings in Thought and Language, Cambridge University Press.

(2) Cutrer, L.M.(1999): Time and Tense in Narrative and in Everyday Language, UMI dissertation service.

ここ最近大学院の授業や勉強会で以上の2書を読んでいます。どちらもメンタルスペースによる時制論で、従属節の時制の問題など興味深いアプローチをしています。1の3章は2のまとめです。従ってこのアプローチの面白いところは1を読めば十分ですが、2もフランス語の半過去の分析があり、読むに値します。

曾我祐典

(1) Grunig, B.(1991): Les mots de la publicite, Presses du CNRS.

フランスの広告コピーの言語学的分析。広告は言語のもつ可能性が大いに（ときには驚くようなやりかたで）活性化されるジャンルとして興味がつきない。

(2) Traverso, V.(1996): La conversation familiere, Analyse pragmatique des interactions, Presses Universitaires de Lyon.

コーパスは、自宅を訪れた親しい人たちのあいだのやりとり。会話がどのような要素から成り、どのように展開するものであるかを明らかにしようと努めている。著者には、Nathanの128シリーズのL'analyse des conversationsという入門書もある。

藤村逸子

(1) Becquer, A. et al.(1999) : Femme, j'ecris ton nom... : guide d'aide a feminisation des noms de metiers, titres, grades et fonctions, Paris : La documentation Francaise

女性形職業名詞の作り方マニュアル。L.Jospinのpr词aceつきです。

(2) A-M. Houdebine-Gravaud(1998) : La feminisation des noms de metiers; en francais et dans d'autres langues, Paris : l'Harmattan

政府より委託されて行った、女性職業名詞の使用に関する社会言語学的な研究報告書。

前島和也

(1) Saunier, E.(1999):“Contribution a une etude de l'inchoation :“se mettre a + inf.”. Contraintes d'emploi, effets de sens et propriete du verbe mettre”, Cahiers Chronos 4, pp. 259-288.

表題の動詞句に見られる制約や類似表現との違いを検討することでその本質的特性を浮き彫りにすると同時に、一般に<(se) verbe+a inf.>における主語と述語の関係を規定しようと試みている。

赤羽研三

(1) Eco, Umberto (1996): Six promenades dans les bois du roman et d'ailleurs, Grasset,

語りの視点から、ネルヴァルの『シルヴィー』等の分析を通して、半過去やその他言語に関する

る興味深い考察がなされ、考えさせられることの多い入門書。

三藤 博

(1) 荻原裕子(1998): 『脳にいどむ言語学』 (岩波科学ライブラリー59) 岩波書店  
理論言語学の最大の目標である「人間の言語能力の解明」は、これまでは純理論的な仮説を立ててそれを言語データに照らして(いわば間接的に)検証する、という方法しかなかったわけだが、ここ数年の測定技術の飛躍的な進歩などにより、人間が言語を用いている時の脳の活動状態にある程度まで直接迫れるようになってきている。本書は、この新たなフロンティアの現状を、日本における第一人者が大変分かりやすく解説したもので、シリーズの紙幅によって制約された128ページという薄さが惜しまれるくらいの好著だと思う。

川島浩一郎

Neveu, F. (sous la direction de) (1999): Phrases : syntaxe, rythme, cohesion du texte, Sedes  
コロキウムを基にした論集. 16から20世紀にかけての文学テキストを題材として、「文」という概念の有効性の問い直しを試みている。

春木仁孝

(1) 亀井孝(1998): 『お馬ひんひん』 (朝日選書616) 朝日新聞社  
日本語の語源について久しぶりに楽しめました。  
(2) 黒田龍之介(1998): 『羊皮紙に眠る文字たち—スラブ言語文化入門』 現代書館  
つい十把一からげにしてしまいがちなスラブ諸語について、気楽に知識を深められる本。軽すぎず、嫌みのない楽しい読み物。  
(3) 工藤真由美(1995): 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』  
ひつじ書房  
大学院のテキストにしてやっとならぬと読みました。読みながら、頭の中では常にフランス語と比較していて、改めてテンス・アスペクトの問題が普遍的なことを痛感させられました。テンス・アスペクトを考えている人は是非一読して下さい。

編集後記

『ニューズレター』第8号をお届けします。以前から、是非載せたいと思っていました来日したフランスの言語学者インタビューをやっと実現することが出来ました。インタビューをして下さった尾形編集委員、ご苦労様でした。毎年、何人かはフランスの言語学者が来日していますので、是非来年度もこの欄は継続したいと考えて、既にインタビューを依頼しています。また、今回は新しい企画として、最近読んだ面白いフランス語、言語学関係の本や論文についてのアンケートを実施してみました。見落としていた本や、タイトルだけではよく分からなかった本など、なかなか役にたつのでは、と自負しています。お忙しい中を、アンケートに協力して下さいました皆さん、どうもありがとうございました。

編集委員会と会員の皆さんとをつなぐ手段として出発したニューズレターですが、編集委員会への質問や要望がございましたら、ご遠慮なく事務局やお近くの編集委員宛にお寄せ下さい。ニューズレター上でお答えしていきたいと思っております。

また、ニューズレターのバックナンバーは学会のホームページで見ることが出来ます。新入会員の皆さんは、是非一度古いニューズレターをご覧下さい。

本号の編集は木内良行氏(大阪外国語大学)の助けを借りて、春木仁孝(大阪大学)が担当しました。レイアウトと版下製作は東郷雄二(京都大学)が担当しました。

(H.Y.)

学会ホームページのURL

<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/belf/home.html>

事務局のメールアドレス

flsアットマークlang.osaka-u.ac.jp